

## 岩手医科大学歯学会第14回例会抄録

日時：昭和57年6月26日（土）午後1時30分

会場：岩手医科大学歯学部C棟6階講義室

演題1 口腔内より分離した *Haemophilus* 属について

○本田 寿子, 田近 志保子, 濱田 育男  
柳原 敬, 金子 克

岩手医科大学歯学部口腔微生物学講座

ヒト上気道に常在する菌として知られている *Haemophilus* 属の口腔内における実態を把握する目的で、健康成人の唾液と歯垢からの分離を試み、その分離株について生化学的性状による分類と薬剤感受性について検討したので報告する。

健康成人17名の唾液と歯垢を材料とし、Bacitracin (300 $\mu$ g/ml) を含むチョコレート寒天培地を用いて、定量培養と分離を行ない、形態とX, V因子の要求性から、*Haemophilus* 属と同定した。

定量培養では、17名の唾液、歯垢中の *Haemophilus* 属の菌量はそれぞれ、平均 $5.4 \times 10^6$ /ml,  $5.6 \times 10^5$ /gであった。分離した139株の *Haemophilus* 属について溶血性, porphyrin tert, ornithine-decarboxylase, indole, urease, oxidase, catalase の7つの性状について調べ、分類した結果、*H. influenzae* は7株で biotype I, II, III が分類されたがいずれも唾液中のみ見られた。*H. parainfluenzae* は115株で biotype I は唾液にやや多く、II は唾液にのみ、III は唾液、歯垢両方に見られた。また *H. aphrophilus* 5株は歯垢にのみ見られた。*H. paraphrophilus* は9株分離され、唾液に3株、歯垢に6株、*H. parahaemolyticus* 3株は唾液にのみ見られた。

各検体から分離された *H. influenzae*, *H. parainfluenzae*, *H. aphrophilus*, *H. paraphrophilus*, *H. parahaemolyticus* を含む41菌株について、PCG, PIPC, SBPC, ABPC, CXM, CZM, CMZ, EM, MINO, TC の計10剤を用い、化学療法学会の測定法で最小発育阻止濃度を測定した。ペニシリン系5剤のうち PCG は3.13 $\mu$ g/ml にピークがあり、やや

抗菌力が劣り、他の合成ペニシリン4剤は優れた抗菌力を示した。セフェム系3剤のうち CZM は0.05 $\mu$ g/ml にピークがあり、最も強い抗菌力を示した。EM, MINO, TC はそれぞれ1.56 $\mu$ g/ml にピークがあった。またPCG, セフェム3系剤にわずかに耐性菌があった。

## 演題2 犬歯の機械的刺激による大脳皮質体性感覚野 S I のニューロン応答について

○平 孝清, 松本 範雄, 染井 宏祐  
佐藤 匡, 鈴木 隆

岩手医科大学歯学部口腔生理学講座

歯根膜感覚情報の大脳皮質レベルでの処理機構を調べる目的で、ネコの上顎、下顎、左右合計四本の犬歯に機械的刺激を与え、これに対するユニット放電を大脳皮質体性感覚 S I に刺入した微小電極を用いて細胞外的に記録した。口腔投射野は前冠状回の限局した領域(約 $3 \times 3$  mm<sup>2</sup>)にあり、犬歯の触、圧覚投射野もこの中に含まれていた。ここでは両側性投射がみられ、しかも領域を歯牙別におおまかに同型復原的に区分することができた。すなわち上顎歯は冠状回の外側、下顎歯は内側、対側歯は尾側、同側歯は吻側にそれぞれ投射していた。

各歯牙へ与える機械的刺激の振幅値、速度、持続時間などのパラメータを変化させて、これに対するユニット放電を P S T ヒストグラムとして記録して応答特性を検索した結果以下の事柄が明らかになった。

記録したユニットのうちの大部分(13/17ユニット)では、応答の初期に放電頻度のピークがみられ、その後時間と共に減少するいわゆる phasic 型の応答パターンを示した。この初期最大放電頻度は刺激速度の増加と共に増加したのに対し、刺激速度が一定の場合は刺激振幅を増加させても変化が少なかった。また与える刺激の方向によって放電頻度が変化する、いわゆる方向選択性をもつユニットが観察された(5ユニット)。